下

淺瀬弘波下巻

冬歌

初冬

能武太

霜やとる社庭の芝生より霜とゝのゝ野風さむし

惟昇

さゝきの原霜うちきゝふり出る日社のもゝむ小春よりよけるうれ

初冬霜

能武太

けさゝえ社ふもちゝ社うき祭拍ゝあゝ永ゝ出ゝけゝれ霜やあくゝん

芝の中より初霜みえゝゝ野の中ゝ霜さむく冬さむく冬より冬ゝる郎

霜おく雲とみるまで霜おきて海茅ヶ原よりあらはれにけり　周吉

田家初冬

刈殘をおくて穂うなよ出るまでに新日照るゝ小山田のさと　長行

夕時雨

山の端よりこのゝふく夕日雨もちまちよきえぬと見せしくもふる　清風

月前時雨

月新るくりもたまたまに竹のたもとに降しくれかな　久之

うき雲のさゝめなきせの新月をもたまはるゝ時雨ぞ

山松の末ぢかなる月をみえ山のゝ端うるはしくぬるゝ　竹子

山徑時雨

やとりせむ家ゝよなきを見ぬ山路しくれて日ぐるゝ里　縫子

山家時雨

見の山ぢ松のこかゝゝ雨ぞかぬ新蝉よ声ぞ降あり　清風

草菴時雨

志のゝゝぢ雨ぞ声ぞ見ぬ山のやまぞ雨ぞ　晴勝

関路時雨

ひのゝ松ぢ岸のゝ雨ぞ山のゝくもいくとも月よりかぞるん　惟昇

雨後落葉

降さくる時雨の雲はたえ間より初紅葉こそれそ山風さむく　瑞穂

山家落葉

ゆきすぎ中は新もうもきそ常の戸よ木の葉ちりこそ風のこそ　清風

ものさびそ夕日さえ行山さとは松ねさせく落るのみちそ　よみ人しらず

落さて一峯のもみちは雑ものかきねくよ残り落るこの邨　要三

水邊落葉

世の中はちりもうのさぬ山深はちりのきみきはよ落るうきちり　清風

橋上落葉

岩川のさて一打さこそ山のつちはまはうへよちるのみちり　久之

夕木枯

夕つく日しくこそこのさよ新きえそ時さまされはのしの風　清芳

深夜木枯

さよ更そ庭の落葉さはさく女風峰はこ所〳〵吹あちさて　惟昇

山家残菊

中の色ちのつかさふきさ山さはこのきねよ残るさ葉の色　清景

橋上霜

更ぬさ人行のひ孤さ大橋よあく霜しちくこそさ橋の風　惟昇

山家霜

雲さゆる冬の松の梢にはあらぬ白雪きらめく山の尾おろし

山路霜　清風

山陰のをぢの道は雪乃重のうへゆる花の宮さけさ

湖氷　正藏

はるかなる人の住家のこゝろをるこれ水うの色ら〳〵波の面

海邊寒蘆　道香

みるをふるもの〳〵の枯葉よりあとをとゝ沖風さ吹る難波江の浦

難波の浦のあし原の秋の色もうすくもうつるゝ

月前千島　長行

雲むらの山陰ゆる月さえてこのれる川よりゆ水

島陰千島　清芳

月落てくもきぬのふ夜ちう書よりの岸の雁の

秋色は月のうへ　惟昇

秋の雲ちぬ磯よりの浪はうれハうる羅手ちうゝ

江水鳥　清風

難波江の月のうへ水舟ふ秋ゆ夢ゆ後の手ち鐘

冬鶴　要三

なるとの江はみきはの芦ゆ雪のれて雪ちうねゝ寒ゆ

冬眺望　惟昇

[illegible]

霽　清風

[illegible]　能武太

[illegible]　長行

[illegible]

寒月　惟昇

[illegible]

閨寒月　房子

閨のうちも寒あきはてぬ　清風

森寒月

[illegible]　惟昇

原寒月

寒の空月出[illegible]月[illegible]

江寒月　清風

[illegible]

海邊寒月

[illegible]

[illegible]

みやこの富士のうら〳〵雪ふる縁のこゝろねはこゝに雪けぶるらん　棟貫

待雪

まことにはいつゝはもらん春の雪のみぬ日もまきの峰の志ら雪　吉郎

山初雪

ゆくさきのうら〳〵さびし雪の路ふるうはめて雪をゝもゝとめうけは　磯雄

ゆくらゝと都の人やあのむこん雪もむ山ゆくゝ松のさ川雪　義久

雪

雪の中はちう城きこのあるゝ所よりふり出をれしかの水雪　景正

大出はうゝはのうを弾〳〵あきを出るも山もはるる雪うれ　清風

連山雪

ゆくさきのうら〳〵ふるゝ山ゆくゝ雪ゆ松のうるゝ山ら雪　景正

名所雪

さゝなみの松はゆらゝ〳〵ふる雪をきゝうつ浪の花のゝ雪　可菴

雪中早梅

春のくるゝみちもあきまを雪ふるうつり花ふるゝ梅うゝ　可菴

待春

ふるさとまゝ老よゆる雪も春をゝ人よ雪ゝ雪　能武太

閉居歳暮

年波をうき世をおくるもむ人の禮をうへまもりけるこの歌

物学ひよ外國よりのつ〻ふ系子社物うへきを

行くとはるゝのくれよ　房子

こ年孫をこのへうもむ日をうをつ〻ふ年ゆ人ふ〻ふ年ゆ年

戀歌

戀　吉郎

たゝちゆの親をもいたぬとまをるゆかをふをいひ人を寄き

春戀　惟昇

ゆ〻雲の遠山の踏みたゝ寄あをぬあるひを吉ふ人ゆ年

夏戀　棟貫

おのふ人出をゝちぬ万ゆ夕をゝ風のこまつと人ゆ見るゝ舞

清風

ゆゝう物よ吉のむ芳蕊のうよ東を美津ゆ里ゆ蜂をそ〻ふ

變戀

風ふかぬよりそよなる初きりの夕ぐれ

不見戀

はるかなる人のゆくへもそらめぬ浦のいさりび

不逢戀

天の川とりよ一夜のよそうらやましくもなる舟こひ

切戀

我方さへ今をけふりとなるほのうのゆるあひそくるこゝろ

寄舟戀

うしろめたく系方あまの捨小舟よ添ふこゝろあみよめぬ思ひをあき

寄亜戀

景正

うちつけをいつゝ志ぐせもむくしけふこゝ後まくあり山まこゝを

ゆる人の梅見よ志けるあとゝて世よかゝりて

惟昇

梅の香をたゝねとよ志あそ旅ねする系る系をあとゝれさらん

雜歌

明治十二年の春かゝり海軍子弟師範學校の開業式の時祝詞を述へて

清風

ちはやぶる神の心はくゝよりとなりて世よりはつかうひもゝ年を経て
同年おなじく學校生徒の拜するみさゝゝ歌ゝもの畏く
くゝも　天皇のみことのりかゝるさよはつる歌　皇后宮様御
歌まゝ有栖川宮の御筆揮掌侍祝拔敬ゝのさゝやうに
ゝ雲の上まゝ学ゆゝうはつくゝの海の底の事務の夢と
よめ海ゝなゝとゝるゝゝゝ紙さうつる歌見なゝうゝよ
みゝなゝ海つゝるうゝ

[illegible]

いとも如何にきき雲にたゝよひていやしきあのさゝうちよめば

[illegible]を生さへ生ゝ法よりを写作りを　三原　よぬ子

[illegible]人のみまもりつゝ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]の海に[illegible]の藤[illegible]を

田中　米子

[illegible]の[illegible]この法[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]この法[illegible]

明治十五年秋池袋清風園にて[illegible]

又をうこの[illegible]　可菴

[illegible]を式[illegible]道[illegible]人のあらへき

米沢の人は七十賀よ

[illegible]代を強ん[illegible]は七[illegible]の[illegible]

三村日脩翁の年賀よ　吉郎

[illegible]の[illegible]の[illegible]

よみ人しらず

うつきみの世にうき雲[illegible]の[illegible]を[illegible]

長行

武蔵の道にうへよりの[illegible]

明治十四年一月京都にて[illegible]記念會

清風

[illegible]

明治十六年十二月東都[illegible]同志社[illegible]彰業館を立て
[illegible]定礎式の附属[illegible]中の鉛の匣よ[illegible]

冊[illegible]中よ

来の[illegible]よ[illegible]ひ[illegible]ある[illegible]人の為い[illegible]の心[illegible]

ある[illegible]

さつ[illegible]

[illegible]国の教師[illegible]

日[illegible]の人[illegible]

明治十三年[illegible]幼稚園の保姆[illegible]

[illegible]

[illegible]

同一年[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吉郎

行基菩薩の法性の寺称地蔵院の寺にて

ひのもと旅立ちむとする家出世よりのたりて　惟昇

東海道をうきつゝ行へき旅ゝ絵ゝ

友の比津田元親の東京より帰る別に　清風

谷汐を惜むと絵ゝ

ひのもと社友朋ある性郭うひのうの勉学ひよりの

里者原馬のたなむけよ　惟康

中ゝ西ゝこゝなる絵ゝ

ひのもかゝ世ゝ社の国より帰りる時

○

ゝ絵ゝるよ法世の中よ者のゝへゝ

ひる国よ者のゝ帰りゝ

来ゝ別絵ゝ

ゝゝ者ゝ

清風

可菴

海のへよ漂行ゝ

津田久之ゝ東北部よ帰る別に　清風

なのゝへゝゝ

ひのゝかよ者ゝ学ひよ法のゝ

彼国ゝ帰る晩餐ゝ

ゝ者ゝ我者よかゝゝ

星をあかみて

やまの國のこのもとあるきハしぬるも高くなりぬ夕くれの出

房子

旅立て　きるとき　ちりをこのへりそへて　能武太

はるかなる　ちのたち出て　岩山を　杉の木の間よりなりよけるこの形

春ちかみ　夜あけよりて　旅よ出ん　ともしの

要三

とき白川を　ちりて

たちち　杉の枝　毋を　ゆりて　立いて　ちる　ちりをしるや　白川の水

房子

夕旅行

ゆくさきを　ちる　ちりをくも　見つる　遠山の　端ばみち　月のこのけ

明治二十年の秋　春ちる　父君と　やまを　出ん　ものし

けるとは布留川の橋をたどりて　清風

高き　杉の枝　毋　ちる　ちりを　ふる　時　高橋　ちる　ちりふれ

ゆく　三輪　山を　たどる　ちりよ　見て

移人の　ゆりて　ふる　ちりよ　春　きハはるかなる　見ゆる　三輪の　山を

ゆめり　かよ　ちの　きる　時　記りの　中よ

吉郎

和國へ　ゆく　春　むかる　仮　ちる　仮　ちる　和國　ちの　ちり　ちれ　ちる　見

北の海よ　ちる　きぬ　ちり　夕　和の　ちり　ちる　ちる　ちの　形

旅情

能武太

たち　ちり　春の　おと　ゆく　ちる　ちる　ちを　ちる　なる　ちを　後を　ちる　へ　ちり　ける

旅にしてこゝろされぬ身のおたちし旅の空にて時のかなしさ也けり

吉郎

常ひにしてうれしき事を見れハふる里ハ親の玉章ひらくなり

長行

○

古里のおやハよろこひをおりふしてなつかしき旅路の重荷之ハせ
かゝ錦きて帰りて来る時とハおやのみさゆハつゝかなきかも

清風

○

京都より故郷に帰るとき

旅人は古郷にのみやうつゝらん帰らてみぬ木曽のかけ橋

若陰の沢田に雁つく華よりもおもふ木曽の山路に帰りなるらん

吉郎

こゝのやさしなるゝよひも身ハ旅の空にて社まれ

明治十七年冬夜をこめて京都より故郷に帰り
ける時

長行

發句の花よりまれハふるさとに咲かけし花にめぐらしきハ

旅よりかへりける時

帰りきし我こゝち有たらち旅の母あやみをおもしける哉

能武太

寄花無常

人の世ハはかなしの山桜咲て見えは散るまくに

道子

慶應三年の秋祖父清芳の死去を悲ひて

清風

ぬきこの夢路はのりよりつゝされて世よなき人を恋しうりける

同四年はるの頃母君のやまひ日つゝあり給へハ

なちち給の母をめくみをむくまもむなしふ成ぬとなりよるゝ

母君はうせたまひけるとき

うつせみのかゝ成世をよ強しあきていのるまよ冥いのりけむ

なき魂は冥土にゆくらひ

大鏡時孫の身まのり給る時

海山をへてこゝ〜君り旅あるをたのうもきの海〜をの城

近見ゆり者海村四種春り分まのりをる

ゆゝしう物哀も旅路はさ中〜さる世のうれをおもひ出〜舞

四月廿六年よ学はる友ある某う東の都よりうみあをせて

るこの人〜をこゝ正奥る

山さゝ松蔭繁う下よう花のはさて朽さてむ冥をいのそれもうなる

深草は元政上人の庵前よて　可菴

冥土の月ゆゝきぬあをこゝ冥のくさの芝は下よやなけきよ月〜舞

述懐　房子

冥よ法めるゆゝ〜ゐ月をれてうみとうゆ松さらゆく末をおのひちて

清風

神のうへよなそぬあをみのむ〜〜生ふるこのひもなき世ある

何〜寄の山田は冥つち給よる生を世をいろ〜よ拾むとの冥う

うつきみの春世を秋の物きあはせ春きはまるよ神を潜める

よみ人しらず

大御神あまをとなの人絶う分れはてるなきの雪のめをきぬ

雪よかくよ老を添母の雪くさまは分る死ぬるもいのらうみむ

あもちこと雪よおのへと中しよ初六つきぬうは分ありけを

折よふ生こる　棟貫

うつきみの世ようとまるを雪の春ひのこをまをけを

寄道述懐　清風

雪も求も神のさのえを見を添世ようきい人のさ絶ありを

なのとちくうせくありぬ世の中れまこはありしも神よまを世て

下十五

懐舊非一

さまくよをもの〜むのをきのふ春世を春きさちさをまれ　清芳

懐古人

いのをもりさ絶法くこをいまへの人をいを我を世よ絶〜春も　周吉

芳山懐古

よしの山むの〜はのをなを添ふのくを八〜日をこれを花

香川景樹宗匠は四十年回よ對花憶昔といふを我　清風

大井川むの〜社影をこうの人をも汀の雪をなの見一添の郷

おもくく春月朧こと云ふをを　俊秀

うち霧む月さへむかしにかへらねど見る人はなし芦濱のさと

吉郎

おほろよは手向の水にうつしゆき星は菖蒲の葉末の月

清風

おなしく霧中花を

わかれし世をこのへぬ水に大井川堰のこのはへのもちむまへの水

會津白虎隊のうた

いさをしは神のみさとにやすらはん飯盛山はちりの月

俊秀

往事如夢

花に酔ひ月にねふりしあしたの邯鄲の夢はうちさめられ

清風

その(?)ゆくりなくねざめを夢のしらべはまゝにと思ひぬるなり

夢

惟昇

夢はさまたげ緑はおのがはなかしおもはぬまでもみえゆきけり

清風

うつゝにもさめぬものをぬきまは夢にむかしのみなるらん

可菴

ほのかくら影のみえしかうつゝわかれゆめなくさむこのよはなる世に

朝眺望

春はまださぬ親のおもかけたゆくに見えし浦や菖のあさけなるらん

惟昇

かなしくも峰は松原にしらくものこの浦かけのつき

行ゑ知らぬ月のうつるくまなきをねたましがるこゝろ　清馨

山眺望

行人の絶なるまゝに山陰の夕ぐれさびしかりしこゝろ　清風

海邊眺望

山松の時雨まの間よりうつる沖のあくもみえそめられ

行るゝ秋を遠江灘を過るかな　吉郎

橋を渡る人の引うへの霜しらゝめそめふゝの達山

ある年の秋天子灘をさるゆゑ　清風

みゝ沈の江路さるくゝそめそゝつゝ天子の御

山雲　清芳

ちらゝめあきの雲よりのぞくひよかたる八山のさゝとくり　景正

山家水

岩の根の苔の苦しきつく筧いのちのあはきあはれ山の奥うれ　清風

秋の夜長を汲む人もあきとみよあれハ初うきもむん山の井の水

山家夢

今更よおもひ捨てゝうつきを世のあとの夢よ見ゆ舞

中くよ松のあらゝのちよゝむもゝ夢さめ世をうかうれ

澗聲幽

我山をあらゝつ谷乃雲の水ハあるかよ水ハあるゝ世ハ流

文久二年の秋いとあさましきものをしとおもひ侘て

へりて

山陰の宿の戸さしもあきてより日数さへ経るあるくもあるに

言ふ甲斐山の奥なる温泉にまうでしける時

いくしほの川水の夢よさめんみぬの杉風若川君と

沼あるくさのえけるこの所言ふかのしるべ宮の杉ぬむ立

夜の古塚あつさをさけて日枝山中より仮寝ひし

ぬるるこの秋

こ海原の大海えの若間こそ水のきりれ

夏ゆけば秋の来あらし吹やこそこのよ秋く若川の水

柴の戸を叩きてこそ出でたれ多ゆる若川の水　吉郎

市

新市はめせこそもるこの鄙花ものき月ようとそ来つん　周吉

市のうちよ家ゐるきれとかなそより古塚八山の奥よ古とこのれ　俊秀

おのゝ分れ名ちハきてこそ市より出きそ来かふのりけを　清風

故郷草

古江池の河一原ゑこの出そきすりよなりよ考るれ　景正

むのゝまへとそなへぬるさゝやいつまでさきのこるゝのふるもん　長行

古宅苔

ふるさとはむかしのいろかさふきて新よたゝゝよ苔むすよろの　吉郎

野徑渡

こゝゝ身つまゝ井ゝしハ杉のまる理川のたゝれ柱なりけり　俊秀

身の中よねふる理川の淀ゝやいつよ新ゝきさ波ゝゝ舞　房子

名所松

いつまでもかゝゝさゝ岩り水ゝ紀まゝの山姫松のむゝ立　景正

松色映水

水とりのかゝ社ゝ波のみゝゝゝゝ松のまゝ紀のゝゝゝる　松齡久

きつあゝのよゝしゝゝゝ光松よ今もむゝゝのこけゝゝゝつ　祠頭杉

毒日山木なゝき杉よ立ゝゝる杉ゝゝ千代の多ゝみん岩り　能武太

名所鶴

新つくはよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの海紀新ゝき清よなつゝ明ゝ清　惟昇

海邊鶴

角川のゝる沖のゝゝ波ハ遠ゝ千代の群ゝゝゝゝ岩りゝれ　重備

鷲

あしがきの岩よりおりてなく鳴るは世を夢みてとなる浜の寄る波

雞聲告曉　清風

夜をこめて鳥の空音はあふさかの関もるこえ聞まほしきかな

遠村曉鷄　長行

月こそは遠山の端よりかすかにふきてふるの里よりとりのねをきく

雞声茅店霜　清風

庭もうつる夢よりのこり袖もやはらぬ影ぬるるあけぬる雲の外

祇王祇女

袖ぬらす露あるのさとむ世の中はさてのはて夕くれ

源頼政　景正

小夜更て寒うなりまさるかふ〜矣の声きくは大宮のうへよ

毛利元就

宮雲の海はるかのきゝ所は行事はおさふきはゆるてるべ

浦島子　清風

手代強へき袖の都よりうきてはなれ所はふるさと里けむ

屈原　景正

世の中はちりよけのなぬ志ゝ玉ハみのくをさをさやけ

車胤　清風

ひつむ世ハ蛍のこの都も玉鉾の道はさらへとかやきよ汁里

友人　棟貫

よろこびも怨みも世をよそにあまくまき世をさとりあられ　清風

隠者

世の中をそむきかねたる高の松陰よりふる舟うとのうを釣る人やあるを　俊秀

浪

いさなとりよくみえたるとれてうつ磯よりせをはやくるゆつしらまを　清風

船

かきうちあれたうふ事も大和はりこのひたをぬ世をさをうつれ

漁

漕戸ふ舟数あらしをさをくありくら入り世毛天のさ一立　吉郎

漁火

ふるうちよ数ちてまきれとを浦沖つ島ねのほのれいをさを　清風

大空のかりと和とつよ見ゆるこれ松浦の沖は海人のいさり火

鏡　瑞穂

玉おりふこと後をうるちをむのふ如みのをつのき水

歌をよむとかうたをうたふもの
とのうたをなとを遠のいひやうを
なるをよさるをみてをれやをとをと
をるをとをさうの涙より京都の同名社
といふるをかをなをの陵をを西洋の書

[illegible]
はれる[illegible]の[illegible]集[illegible]
て[illegible]とも[illegible]ものは
の[illegible]なんぢをもつのを
[illegible]れの[illegible]

なを[illegible]
ら[illegible]ねの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]勅撰[illegible]
[illegible]

なと撰者のなとも出れひとり
見るんよいたのうちはやてきはい
きひなるへ　なひとをてれこ
見成浅風のなとをつんは
うちて深りうとは世のお人を

のそこむ見測のうちはちも
なうとなめさ風のうちはやはきれ
ゐたれのきっすたひきあ行
きーつ色かまうくふ世の人なあ
さきをいうくまれ叶れと

明治二十一年の春
日向國人安藤惟昇
池袋清風

案山子迺屋乃社中

備前岡山 岸本熊武太
上野安中 湯淺吉郎
日向宮崎 新原俊秀
甲斐身延山 中村可菴
肥後阿蘇 井手義久
筑前福岡 阿部磯雄
肥後阿蘇 佐藤惟昇
越後與板 三輪長行
伊豫今治 重見周吉
東京麻布 津田元親
大坂 秦明
東京麻布 津田久之

肥後熊本 志垣要三
肥後熊本 下村房子
筑前福岡 縄田瑞穂
大坂 矢口信夫
美濃安八郡 北村縫子
肥後阿蘇 藏原惟康
薩摩鹿児島 三原よね子

筑前福岡 白木正藏
備中倉敷 木山巖
大坂 葛岡道香
備前岡山 加藤壽
京都八十翁 新島是水
薩摩鹿児島 田中米子
近江彦根 中島茂子

京都 高松仙女
摂津三田 竹内竹子
丹波船井郡 川勝為子
和泉岸和田 鈴木左馬
肥後熊本 徳富健二
清風 近親師友等
日向都城七十三翁 肥田景正

丹後峰山 松田道子
伊豫今治 竹友梅代子
上野碓氷郡 磯貝由太
神戸 畠山一松
清風幼時師亡 大館晴勝

清風幼時師　隈元棟貫　肥後熊本　下村孝太郎

上總望陀郡　松本元吉子　東京　江夏八重子

清風祖父號睡鷗亡　池袋清芳　同外祖父亡　平山清馨

同叔父亡　平山武幹　同叔父亡　河合重備

同從弟亡　池袋清景　同幼時友亡　大館晴正

明治廿一年五月廿八日印刷
同　年五月廿八日出版

著作者　宮崎縣士族　池袋清風
當時京都府上京區第十七組西日野殿町三番戸青山正義方寄留

發行者　京都府平民　河合卯之助
上京區第三十組寺町通二條下ル妙満寺前町十番戸

印刷者　京都府平民　木下猶之助
下京區第二十一組北御門町壱番戸

版權所有

全部定價金三拾錢